

特集 2

戦後80年 焼け野原から未来へ

～千葉市戦災復興と まちづくりの歩み～

1945年（昭和20年）、戦火は千葉県内の都市を焦土と化し、千葉市と銚子市は壊滅的な被害を受けました。焼け野原となったまちを再生し人々の生活を取り戻すため、国の方針に基づいて「戦災復興都市計画」が策定され、土地区画整理事業を柱とする大規模な都市復興が始まりました。これらの計画は単なる復旧だけではなく、近代都市への再生を目指した壮大な挑戦でした。

戦後80年が経った今、私たちはその歩みを振り返り、復興の理念と努力が現在のまちづくりにどのように息づいているのかを見つめ直す時期なのではないでしょうか。

本号では千葉市の戦災復興を紹介します。



空襲後の焼けた市街地（院内小学校付近）

出典：千葉市デジタル平和資料館「戦前・戦中・戦後・新宿小学校・院内小学校所蔵写真から」より引用

デジタル平和資料館では戦災資料を公開しています。

<https://www.city.chiba.jp/digitalheiwa/>



千葉市デジタル平和資料館



千葉空襲の爪痕と復興の必要性

終戦直前の昭和 20 年 6 月と 7 月、千葉市は二度の大空襲に見舞われ、市街地の大半が焼き払われました。約 230ha が焼失し、8,900 戸を超える住宅等が失われ、1,500 人以上が死傷する壊滅的な被害を受けました。

焦土化したまちで、人々は生活の再建を迫られ、都市の復興は急務となりました。



■ 戦前（昭和15年頃）の市街地の様子（本町通り付近）

出典：千葉市デジタル平和資料館「戦前・戦中の中央区」より引用



■ 終戦から半年後の米軍撮影空中写真（1946/02/28）。
白くなった場所はほとんどの建物が焼けてしまっている。

出典：国土地理院ウェブサイト 地図空中写真閲覧サービス
(https://service.gsi.go.jp/map-photos/app/map?search=photo&id=12575&search_date_from=1941&search_date_to=1950&color_type_ids=1%2C2&scale_from=0&scale_to=99999999&lon_min=140.0763323733902&lon_max=140.1556285494443&lat_min=35.60453726470497&lat_max=35.620321408324614#14/35.60700203900001/140.11608073) の空中写真データを加工して作成。



■ 当時の罹災状況図（赤い部分が罹災した場所）。
広範囲に爆弾が投下されたことが分かる。

出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和 55 年発行

復興土地区画整理事業

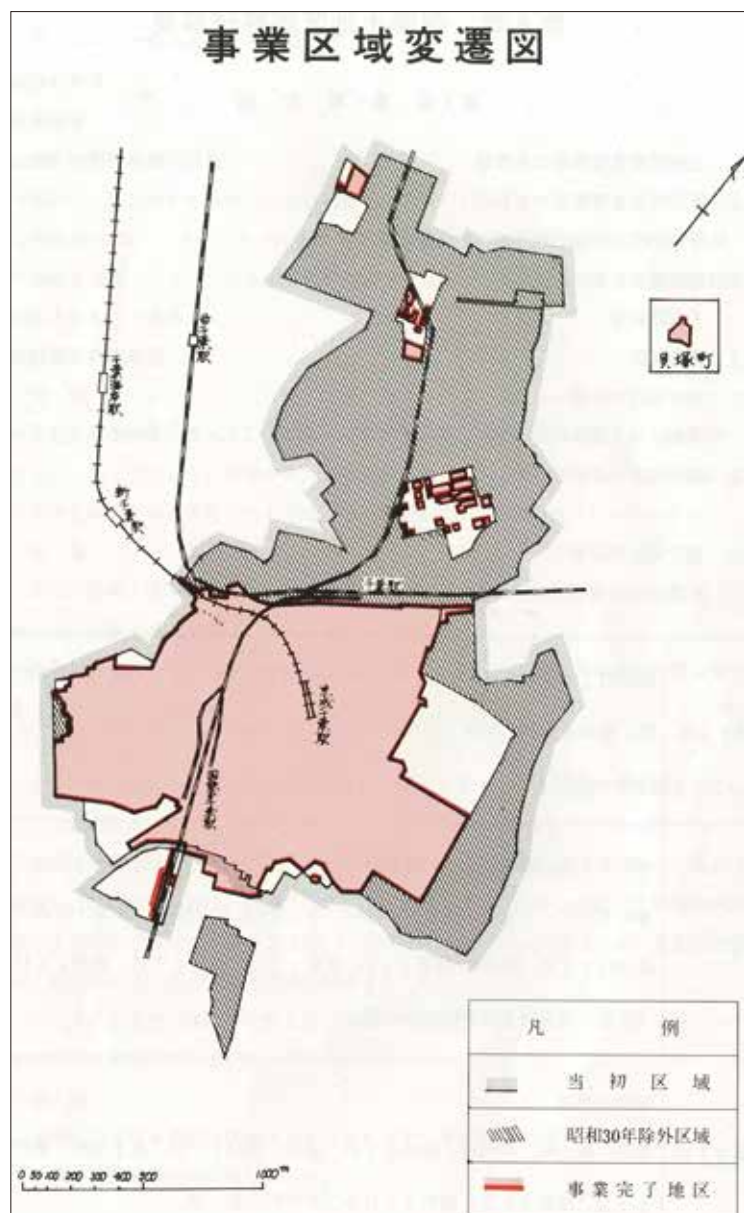
戦後、国は戦災復興の基本方針を示し、千葉市では昭和21年に「戦災復興都市計画」が認可されました。当初の計画面積は約386haにも及び、単なる復旧ではなく、近代都市への再建を目指した壮大な構想でした。主施策としては、広い道路の整備、鉄道駅舎の移転、緑地や公園の配置など、防災性と都市機能を高める工夫が盛り込まれました。

復興の柱となったのは「土地区画整理事業」です。中心市街地を対象に幹線道路の新設や拡幅、駅前広場の整備、公園や緑地の配置など都市基盤の再構築が進められました。一方、栄町や登戸、港町、新田町などの一部地域は「都市改造型土地区画整理事業」として別途施行されました。

当初はより広範囲を対象とする計画でしたが、終戦直後の日本は深刻な財政難や、資材や労働力の著しい不足、さらに公共投資の制約などにより計画の全面的な実施は困難を極め、事業規模は縮小を余儀なくされました。こうした背景から、千葉市の復興事業は優先度の高い中心市街地に事業を集中する方針へと展開され、実際の施行面積は約130haまで縮小されました。当初の理想と現実の間で苦渋の選択を迫られたこの経緯は戦災復興の象徴ともいえるでしょう。

こうした数々の制約との葛藤を経て、戦前の雑然とした街並みは秩序ある都市空間へと生まれ変わりました。

当時の事業区域変遷図

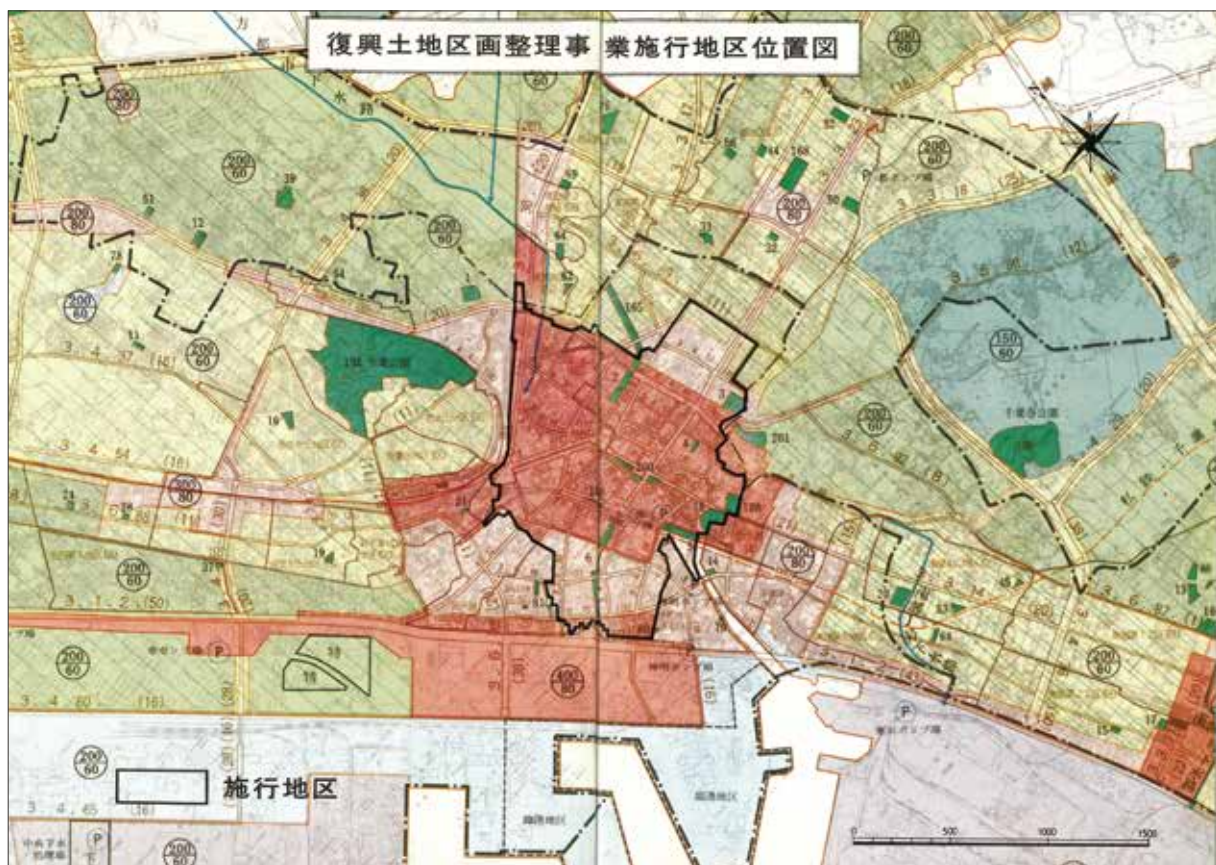


事業概要

面積規模	・386.8ha
認可時期	・昭和21年6月27日
主施策	<ul style="list-style-type: none"> ・駅舎移転 国鉄千葉駅 国鉄本千葉駅 京成千葉駅 ・広路整備 千葉駅 ～中央公園広路等 ・緑地整備 中央公園 通町公園 新宿公園等
完成時期	・昭和55年
都市構想	<ul style="list-style-type: none"> ・近代的都市基盤整備 ・都市防災の考慮 (広場、緑地、駅前広場) ・都市機能の再構築 (交通・緑地・公共施設)

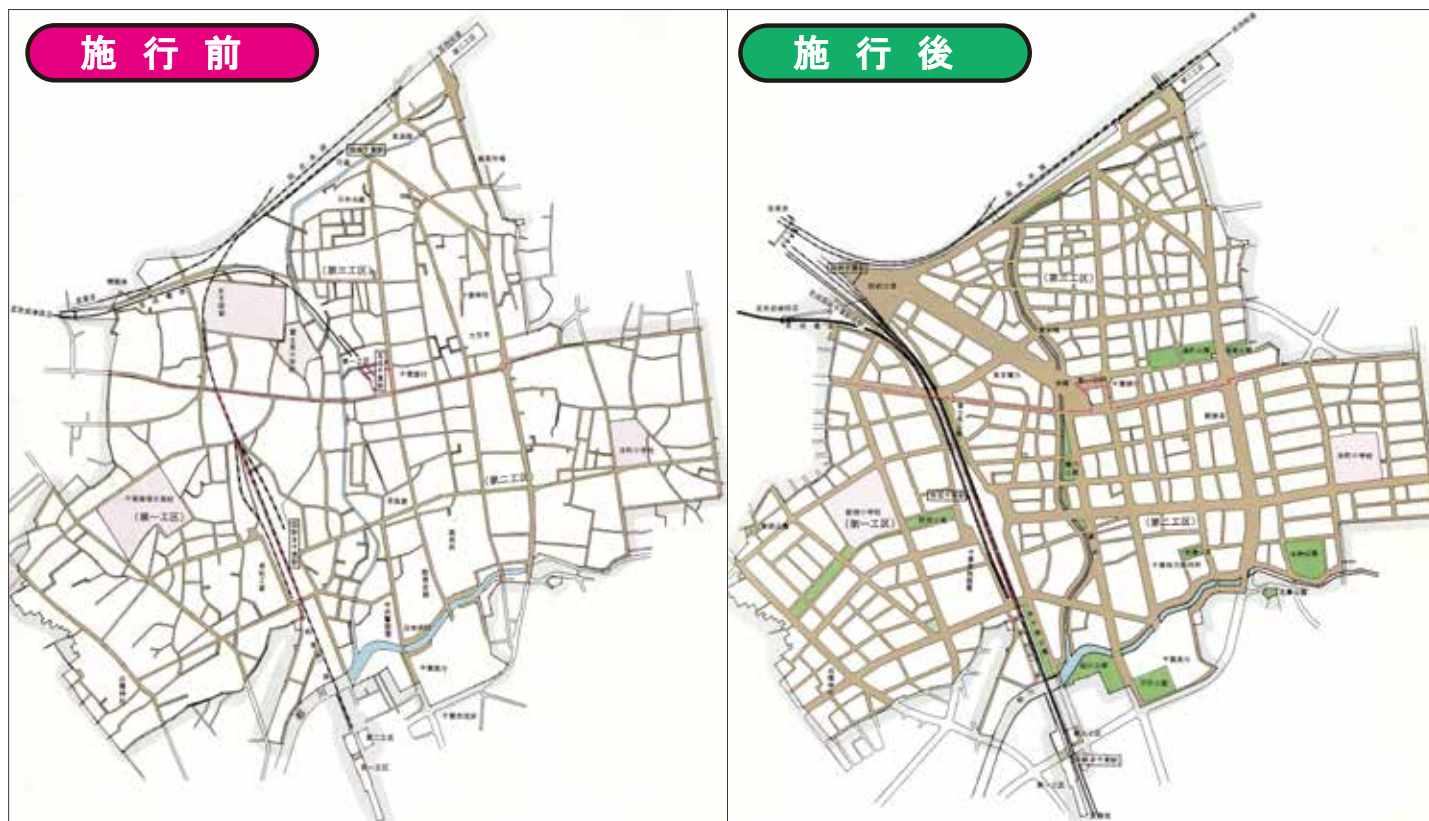
出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和55年発行

当時の施行地区位置図



出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和 55 年発行

当時の事業計画図



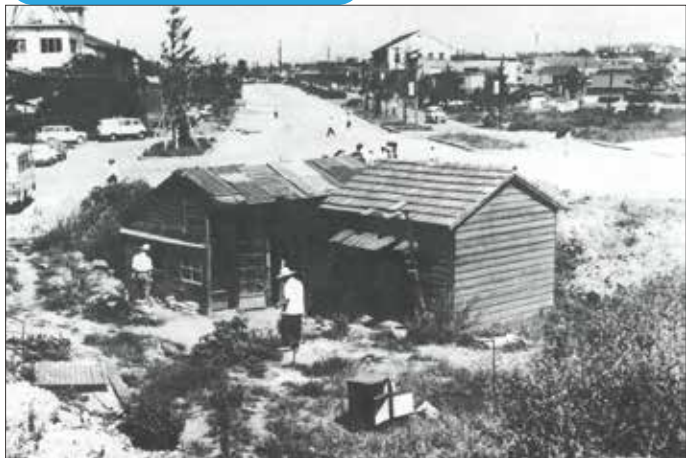
3つの駅の移転、それに伴う線路の移設、広い道路の整備、緑地の充実と都市機能が高められました。当時国内でも例を見ない大事業であったことが、事業計画図からも読み取ることができます。

出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和 55 年発行

土地区画整理事業によるまちの変遷

土地区画整理事業により整備された都市機能を高めた街並みは今も受け継がれており、現在に至るまでの千葉市の発展に大きく寄与したといえます。

千葉駅前大通り



事業前の駅前大通り付近の様子
出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和 55 年発行



駅前ロータリー周辺には大型の商業ビルが立ち並び、中央公園から千葉駅へと一直線に続く大通りは幅広い車道と歩道が整備されています。

中央公園付近



移転前の旧京成千葉駅前の様子
出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和 55 年発行



駅のあった場所は公園となり、都市空間における人々の憩いの場として現在も親しまれています。

京成千葉中央駅付近



移転前の旧国鉄本千葉駅付近の様子
出典：千葉戦災復興誌 千葉県都市部 昭和 55 年発行

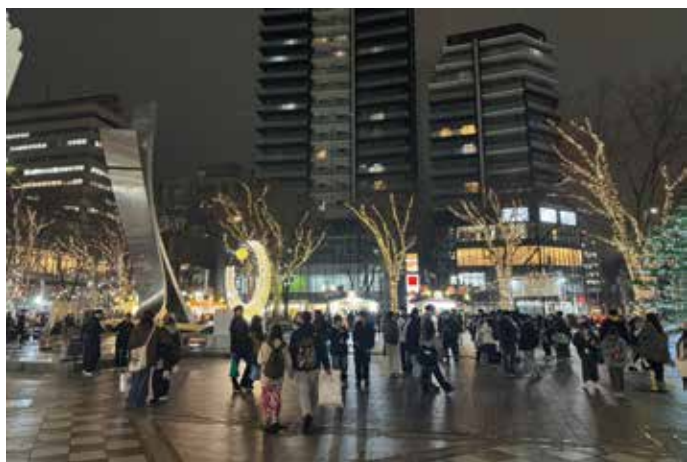


駅にはホテルや映画館の複合施設が併設され、その周囲には様々な店舗が並び立ち、多くの人々が行き交っています。

中心市街地の新たな賑わい

中央公園では季節折々様々なイベントが開催され、駅から公園へ続く大通りではウォーカブルなまちなかづくりを目指した取り組みが行われています。

昨今では夜に焦点を当て、夜間に行われるイベントを通じ、にぎわいの創出、地域経済の活性化の取り組みが実践されています。



中央公園でのクリスマスマーケットの様子



イルミネーションで彩られた千葉駅前大通り

平和への誓い・未来への継承

平成元年、千葉市は「平和都市宣言」を行い、戦災の記憶を未来へとつなぐ取り組みを続けています。市内には、戦災の犠牲者を悼む記念碑も建立され、平和への誓いを形にしています。

復興計画で整備された広路や緑地、防災思想は今も私たちの暮らしを守り、都市の骨格として息づいています。



中央公園に建立された戦災復興記念碑

千葉市は、太平洋戦争も終りに近い昭和20年6月及び7月の2度にわたる空襲に見舞われ、市街地の中心部約230ヘクタールが焦土と化した。その被害は建物8904戸、死傷者1600人を数え、誠に悲惨な状況であった。

同年8月15日、終戦となるや、政府は全国120余の戦災都市を対象に、「戦災地復興計画基本方針」を定め、平和な文化都市の建設をめざした。

これに基づき千葉県は、千葉市と協力して土地区画整理事業による千葉市戦災復興計画を樹立した。その計画の柱は、防災を重視した市街地形成と国鉄千葉駅、本千葉駅及び京成千葉駅の移転を骨子とした交通網の整備であった。

一方、市民も戦後の生活困窮にもめげず、郷土復興の意欲に燃えて立ち上がり、一致協力して文化都市づくりに邁進した。

以来、今日まで約160ヘクタールの区域にわたりこの事業を進め4274戸に及ぶ建物と5箇所の墓地の移転を行い、道路、公園等の公共施設の整備を実施した。そして昭和54年10月、多難を極めた復興事業もここに完成した。

これひとえに市民及び関係機関の御協力の賜物と深く感謝の意を表するとともに、千葉市の平和と発展を願い復興事業の成果を永く後世に伝えるため、地区の中央であるこの地に記念碑を建立する。

昭和55年2月

戦災復興記念碑に刻まれた碑文

戦災復興から現在の千葉市へ

戦災からの復興という大事業の道のりは険しく、財政難や資材と労働力の不足、様々な制約の影響で、その完成までには三十有余年の歳月を費やすこととなりました。

この間、臨海部の工業化に代表される急激な経済成長と人口流入が続く中で、千葉駅周辺をはじめとする中心市街地の再整備が行われ、近代都市としての骨格が形作られていったのです。

「戦災復興都市計画」によって築き上げられた強固な都市基盤は、今日、そして未来の千葉市のさらなる発展を支え続ける礎となっています。

※ 次号では「銚子市」の戦災復興をご紹介します。